

ビジネスチャンスの多いロシア 進出の際にはトップダウンで

委員長 芦田 昭充

商船三井
取締役社長



1943年生まれ。67年京都大学教育学部卒業後、大阪商船三井船舶入社。企画部調査役、企画部副部長、欧州・大洋州部副部長、欧州・大洋州部長、欧州・アジア部長、定航一部長などを経て、96年取締役企画部長、98年常務取締役、99年商船三井（ナビックスラインとの合併により社名変更）、2000年専務取締役兼専務執行役員、2003年代表取締役副社長兼副社長執行役員、2004年代表取締役社長兼社長執行役員、2005年より代表取締役社長執行役員。
2000年7月経済同友会、2004年度より幹事、2007年度より副代表幹事。2002年度社会保障改革委員会副委員長、2003年度年金改革委員会副委員長、2005年度憲法問題懇談会委員長、2006年度ロシア・NIS委員会委員長、2007年度金融・資本市場委員会委員長。

進出しないリスクは大きいと 自信を深めるモスクワ

当委員会では、3月11～15日にかけて、ロシアを訪問しました。まず訪れたのは、モスクワから400キロ南にあるリペツク州。ロシアに2つしかない工業生産型の経済特区のうちの1つで、基本的なインフラの整備、製品加工用資材・部品等の輸入関税等の免除、行政手続きの簡素化・一元化、税制・会計上の恩典など、数々のメリットがあります。リペツクには、伊系の家電メーカーは進出していますが、日本企業は未だ1社もないのが現状です。

次に訪れたモスクワでは、政財界が自信を深めているという印象を受けました。視察先で面談した様々な方が「今後はロシアに進出するリスクよりも、ロシアに進出

しないリスクの方が大きい」というフラットコフ首相が訪日した際の発言を引用しつつ、「今、バスに乗らなければ、日本は乗り遅れることになるぞ」と、強い意志を込めて話していたのがとても印象に残っています。

資本&技術をセットで 外資誘致を図るロシア

ロシアのGDPは1998年のロシア金融危機の時にはソ連時代の60%程度まで下がりました。その後、急激な回復を経て、現在は原油高などを追い風にソ連時代の水準を超えるまでになっています。

今後の経済・産業政策に関して、ロシアは、資源・エネルギーについては国家管理を強め、それ以外の分野については、先進的な技術とのセットで外資を誘致したいと考えているようです。そこには、

副委員長 (役職は8月7日現在)

- ・井田 敏
(日本電気 執行役員常務)
- ・島崎 滋
(豊田通商 顧問)
- ・多田 博
(三井物産 取締役副社長執行役員)
- ・辻本 博圭
(近鉄エクスプレス 取締役社長)
- ・細野 克彦
(日本航空 取締役副社長)
- ・森 敏光
(みちのく銀行 顧問)

委員22名

(インタビューは6月18日に実施)

技術の高度化を図り、現在、国外から輸入されている製品を国産にするという目標が見えます。

今回のミッションで、ロシアにはたくさんのビジネスチャンスがあることがわかりました。日本企業の多くは、ロシア進出に二の足を踏んでいる状況だと思いますが、金融危機の際に一斉に引き揚げた外国企業のうち、特に欧州勢はいち早く回帰しています。とは言え、ロシアでのビジネスには、予期せぬ障壁が待ち受けている可能性もあります。その点では、既に前例のある業種・業態の企業の方が問題は起きにくいだろうと思います。

最後に、ロシア進出を検討する際には、トップダウンでプロジェクトを進めることが大事だと思います。視察なども部下任せにするのではなく、トップ自らが行う方がよいでしょう。その意味では、我々のようなミッションに参加すれば、普通に視察するよりもはるかにハイレベルな人と会うこともできます。今年度もミッションを派遣する予定です。ご興味を持たれたらぜひ参加されてはいかがでしょうか。